



戦争観・平和観はどう変わったか？



7月25日、西部支部がなんば市民学習センターで平和教育学習会を開催しました。講師に神戸市外国語大学教授の山本昭宏さんをお招きし、戦後から現代にいたるまで、国内の戦争観や平和観の変遷についてお話しいただき、この経過をふまえて、今私たちにできることは何かを提案いただきました。以下は抄録です。

【「平和」という言葉を改める必要はあるのか？】

戦後日本における「平和」という言葉は、かつて国民的な理想を象徴するものであった。しかし現在、その言葉に拒否感や「お花畑」等と揶揄され冷笑が向けられる光景は珍しくない。「平和」というのは国家に対する正当な批判になり得ている言葉で、学生によく言うのだが、普段は人を殺したらすごく罰せられるのに、戦争に行って人を殺すことを国家が奨励するのかと。この一点だけでおかしいと思うのですが。「平和」を求める思いは「安全保障」という言葉に方向づけられ、「経済安全保障」「生活安全保障」など、軍事以外の領域にまで広がっている。戦後から現代までのこの変化を五整理し、戦争観・平和観の変質を読み解きたい。

【五段階に分けられる「戦争観・平和観」の変遷】

少し理解に時間を要するが、戦争観・平和観について、対話をするために必要な前提となる認識を共有していただきたい。

第一段階は占領期である。敗戦後、憲法前文と九条に刻まれた平和主義が国民意識を形づくり、武装解除された日本では「戦争がない状態」が当然の前提となった。

第二段階は主権回復後の1950年代。再軍備や日米安保条約への反発から、「平和と民主主義」を掲げる護憲運動が高揚した。社会党や共産党が自民党に対抗する旗印として平和主義を掲げ、「保守・革新」の対立構造が鮮明になった時代である。

第三段階は1960年代から70年代初頭。ベトナム反戦運動に象徴される市民運動が広がり、個人が主体的に「平和」を考える契機となった。一方で新左翼の登場により、「体制化された平和」への批判も生まれた。高度経済成長の安定の中で、日米安保体制を容認する空気が広がり、憲法九条を掲げながら米軍基地を抱えるという矛盾を沖縄に押し付ける「平和国家」の自己像が定着した。

第四段階は1970年代からソ連崩壊まで。「平和」という言葉が選ばれにくくなり、冷笑が広がった時代である。消費者運動やフェミニズムなどの新しい社会運動が台頭し、平和はその一要素にすぎなくなった。日米同盟という言葉が定着し、軍事同盟が戦後の安定を支えるという認識が広く共有された。

第五段階は1990年代以降。自衛隊の海外派遣が進み、日米同盟が唯一の安全保障政策として強化された。安倍政権下で登場した「積極的平和主義」という言葉は、戦後の「平和」を受動的で古びたものとして再定義し、「安全保障」が「平和」を奪う構図を生んだ。こうして「平和嫌い」という態度が社会に定着してしまったのである。

【「平和」を磨きなおすことの意味】

では、私たちはこの現状で何ができるのか。「平和」を磨き直す作業が必要である。戦争体験を前提とした平和の物差しはもはや共有されず、記憶の風化は避けられない。正しさを押し付けるだけでは届かない。私は三つの問いを提示したい。

第一に「戦後日本は本当に平和だったのか」。第二に「世界が平和でないのに日本だけが平和であり得るのか」。第三に「護憲の方法」である。

憲法を護るとは、外側の理想を掲げるのではなく、自らの内側に平和主義を根づかせることだ。護憲を受動的態度と見なす「安全保障」派に対し、より能動的な護り方が求められる。

ノルウェーの社会学者ヨハン・ガルトゥングが提唱した「消極的平和（戦争がない状態）」と「積極的平和（構造的暴力がない状態）」の区別を念頭に置き、貧困や格差、ジェンダー不平等などを是正する実践こそが「積極的平和」の核心としたい。軍備拡張による安全保障の議論を超え、社会の根底にある暴力構造を問い直すことが平和への道につながるのである。

【意見が異なる人との対話のために—上機嫌であることの効用—】

思想信条の異なる者との対話は容易ではない。しかし、対話とは結論を出すためのものではなく、互いが配慮し合う「場」をつくる営みである。太平洋戦争や阪神・淡路大震災を経験された作家・田辺聖子さんは常に上機嫌であり、周囲を和ませる人間力があつた。「上機嫌でいること」が人間関係を成立させる。相手を打ち負かすのではなく、場を保ち続ける姿勢こそが対話の基盤である。

「空想的平和主義では攻められたときにどうするのか」という批判があるが、軍事力の差を埋めようとするより、外交で解決しようとする態度の方が現実的である。日本が緊張の中に自ら飛び込もうとしている現状を直視し、批判することこそが現実を見るという行為である。

戦争がある世界に生きる現実を踏まえながら、「平和」という価値を磨き直すことが、今私たちに求められている課題である。



包括的性教育とジェンダー平等を考える @日本教育会館 参加リポート

8月1日、日本教育会館において、母と女性教職員の会全国集会在「子どもたちに平和な未来を〜護ろう憲法〜」をテーマに開催された。第3分科会「性と生・ジェンダー平等」では、子どものための包括的性教育について、大分の藤定康子さん、阿部詠子さんから報告があった。



2年前、大分県のある小学校で、助産師であるPTA副会長が「包括的性教育」について考える講演を行った。「包括的性教育」とは性を権利としてとらえ、体の発達と生殖だけでなく、性暴力やジェンダー、性の多様性など様々な視点での性教育である。

学習指導要領の「はどめ規定」と呼ばれる「人の受精に至る過程（性交）は取り扱わないものとする」との記載を意識し、教員は指導に慎重になりすぎて授業をしにくいことがある。

保護者が子どもの頃を振り返って「どうやったら赤ちゃんができるのか不思議に思っていた」と語り、教職員は「子どもからの質問にうまく答えられるか心配だったが、様々な視点でのアプローチができることを聞いて、向き合い方がイメージできた」と話していたそう。

グループ討議では、教育委員会が性教育の方針を出しているので学校としても指導がしやすいという地域があった。次期学習指導要領にも「はどめ規定」が継続されるが、会場の保護者から、この包括的性教育を浸透させ一緒に取り組みをすすめていきたいとの声が上がった。



翌8月2日は、両生の自立と平等をめざす教育研究会が開催された。全体会「教室から編みだすフェミニズム〜これからの学校に必要なジェンダー平等教育〜」では虎岩朋加さん（梶山女学園大学）の講演があった。

私たちがめざすジェンダー平等教育は、単に男女の区別をしないということではない。学校の中で性差別的なことが繰り返されていないかを見抜き、別の方法で人間関係を構築していくことが重要だ。そのためには、学校や社会の中の「当たり前」を問い直さなければいけない。教師と子どもとの間に権力関係はあるが、支配や抑圧としてはたらくのではなく、子どもが自ら考え、語り、行動する力を育まなければならない。例えば、「男に追いつくために女もがんばれ」という競争や、男の子が本当は自分の弱い感情を出したいのに自分で蓋をしてしまうなどである。教室でできることは、声を奪う習慣を弱めて、別の関係性を作っていくことだ。

みなさんは教員として「自分は間違っていない!」とっていませんか?子どもたちは、教室の中で感情を素直に出せていますか?「今までこれでやってきてうまくいっている。子どもも納得している」だけでは、自分をアップデートできません。常に自分の感覚を振り返ることができる人になりたいと思った講演であった。

踏み出せば、その一足が道となる 8/2~3 ヒロシマFW

8月2~3日、市教組NEXT!のメンバー12人を含む、計20人がヒロシマ・フィールドワークを敢行しました。

真夏の広島市や呉市の爆心地や戦跡を自転車や電車を使い継いで見学し、参加者同士が語り合う場面もたくさん見られました。「号外」にも参加者の感想を掲載していますが、本紙ではベテラン勢の感想を掲載します。



◇恒例となった夏の人権F.W。三年前の行き先が東部支部の発案でのヒロシマだった。今回はNEXT!主導での開催だったが、前回行かなかった見学先での発見や学びがあったのはもちろんのこと、三年前と同じ場所を見学しても、新たな思いが湧いてきた。

平和記念資料館は何度見学してももう十分だという気持ちにはならない。ヒロシマF.Wは数年の間隔をあけて実施し、多くの組合員に学びの機会がればと思う。

今回は事前学習として『この世界の片隅に』を視聴し、それをきっかけに呉を訪問した。大和ミュージアムに展示されている10分の1サイズの戦艦大和の模型の存在感は凄いものだったが、展示されているもの全てがピカピカで誇らしく、かっこよく並べられていることに大きな疑問と不安を感じた。展示からは戦争の恐ろしさ、惨虐さ、汚らしさが一切取り除かれていたからだ。見せ方一つとっても、戦争の捉え方、未来への向き合い方が違うと感じた。

二日間、多くの若手組合員と話をし、たくさんの思いを聞くことができた。これからも多くの学びの場をつくりたい。(M・K)

◇広島には何回か行っただけで、案内なんておこがましいと思っている。自転車での強行なコースにもおつきあいいただいた。

アオギリ2世を始め、被爆した柳やユウカリをみると生物の生命力には驚きと力強さを感じる。その姿には元気や勇気をもらえるような気がする。逆に81年たった今でも、原爆症で苦しむ人(気持ち的なこともふくみます)がいることも忘れてはならない。

ここ数年、次の世代にどう引き継いでいくのかという課題があるが、僕たちも本当に考えていかないといけない。教職員なので、目の前の子どもたちにどう伝えていこうかという話にはなるが、そのあたりは現場にもどった時にどのような話をしたのか(実践!というまでもなく)、その時の反応はどうだったのか…。今回行ったきりにならずに話ができる機会が持てればと思っている。

ヒロシマにいてこの間、いろいろな記事やニュースをみているといろいろ思うことがある。一人で思っただけでも堂々巡りになってしまうので、これまたみんなとお話をしてみたいです。

(T・S)

【広報部メモ】この夏、ジブリパークへ家族で旅行した後、改めてジブリ映画を鑑賞した。約30年前に作られた映画「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」などを観て、その作品の思いや問いかけなど、現代でも変わっていない社会ではないかと感じた。

しかし、この30年で何も変化なく過ぎてきた訳でもないとも感じる。地球温暖化、世界の中に戦争をしている国や地域があるなど、現代社会の課題は大きいけれど、、、。

これらをもっと自分の課題と考え、自分がこれらにどう向き合うかということではないかということと、教職員として、人として、未来の担い手のこどもたちへどう伝えていくか、改めて考えた夏だった。(T・Y)